特 別 講 演

本会初代会長白井光太郎先生の生誕第百年を迎えて*

末 松 直 次

Naoji SUEMATSU: To the hundredth birthday of Dr. Mitsutaro Shirai, the first
President of the Phytopathological Society of Japan.

理学博士白井光太郎先生は 1863 (文久 3 年 6 月 2 日) 江戸に生れ明治 19 年東京帝国大学理科大学植物学科を卒業、直ちに東京農林学校助教授に任じ翌年教授に進み、同 23 年東大農科大学助教授に任ぜられ植物学講座を担任、植物学・植物病理学・森林植物学を講じ、同 32 年植物病理学研究のため独逸国に留学 34 年帰国、1906 (明治 39 年) 欧米各国に先んじて植物病理学講座を新設しこれを担当、そのあと植物生理学を池野成一郎博士、森林植物を草野俊助博士が担当することになった。同 40 年教授に進み 43 年理学博士の学位が授与された。かくて大正 14 年停年をもつて退職、なお明治 45 年から大正 4 年まで私立東京農業大学講師を兼ねた。

1917 (大正 6 年) 日本植物病理学会設立あげられて会長となつたが、当時は会員の数も少ないために会報の刊行に困難をきわめ、講習会を開催しその収入を印刷費にあてるなど先生を煩わすこともたいへんであつた。先生の最初教壇に立つた際は植物関係の全学科を独りで受持つたわけで生理・病理・分類にわたり多忙をきわめ標本の同定には駒場から小石川植物園まで歩いて行つたもの。菌類の同定は多く P. Hennings に協力をもとめたが植物病理は先生の開拓にまつところ至大。先生を記念しての新属 *Shiraia* P. Henn. タケの赤団子病菌属や *Shiraiella* Hara マダケの小団子病菌属などがあり、種名に

Aecidium shiraianum Syd.
Exobasidium shiraianum P. Henn.
Gloeosporium shiraianum Syd.
Gymnosporangium shiraianum Hara
Melanconium shiraianum Syd.
Microglossum shiraianum P. Henn.

Munkiella shiraiana Miyake et Hara
Mycosphaerella shiraiana Miyake
Pestalotia shiraiana P. Henn.
Phyllachora shiraiana Syd.
Phyllosticta shiraiana Syd.
Pileolaria shiraiana Ito
Pleosporides shiraianus Suzuki
Puccinia shiraiana Syd.
Sclerotinia shiraiana P. Henn.
Uncinula shiraiana P. Henn.
Ustilago shiraiana P. Henn.

等々が残っている。また先生発見の新種もごく慎重な方であつたにもかかわらず下記のごとく相当数に達してい、P. Hennings 等と一緒になつてゐるものもありとし主なものをあげれば

Aecidium epimedii P. Henn. et Shir.
A. macroclimidi P. Henn. et Shir.
A. meliosmatis-mysianthi P. Henn. et Shir.
A. meliosmatis-pungentis P. Henn. et Shir.
A. nikkoense P. Henn. et Shir.
A. viburni P. Henn. et Shir.
A. vincetoxici P. Henn et Shir.
Anthracoidea onumae Shir.
Apiosporium tanakae Shir. et Hara
Aristadiplodia pini Shir.
Asterina pateriformae Shir. et Hara
Asterulla chamaecyparissi Shir. et Hara
Caeoma radiata Shirai
Capnodium tanakae Shir. et Hara
Cercospora cryptomeriae Shirai
Cercospora petasitidis Shir. et Sono
C. polygoni P. Henn. et Shir.
Cryptostictis salicis Shir.

* 昭和 37 年 3 月 29 日、本大会で行われた特別講演要旨

Daedalea styracina P. Henn. et Shir.
Dasyscypha abieticola P. Henn. et Shir.
Didymella evonymi-japonicae Shir. et Hara
Epicoccum polygonati P. Henn. et Shir.
Exobasidium camelliae Shir.
E. camelliae var. *nudo* Shir.
E. camelliae var. *gracilis* Shir.
E. hemisphericum Shir.
E. japonicum Shir.
E. pentasporium Shir.
Hydnofomes tsugicola P. Henn. et Shir.
Hypochnus sasakii Shir.
Kusanoa globbra P. Henn. et Shir.
Lentinus subrigosus P. Henn. et Shir.
Leptosphaeria cinnamomi Shir. et Hara
Leptostromella pini-densiflorae Shir.
Lophodermium chamaecyparisi Shir. et Hara
Melasmia rhododendri P. Henn. et Shir.
Mycosphaerella cryptomeriae Shir. et Hara
M. macleyae Shir. et Hara
M. paulowniae Shir. et Hara
M. zingiberi Shir. et Hara
Ovularia brassicae B. et A. var. *oblongispora*
 Shir. et Sono
Phaeosphaerella japonica Shir. et Hara
Polyporus tuberaster Fr. var. *japonica* Shir.
Pyrenochaeta oryzae Shir.
Sphaerulina aucubae Shir. et Hara
S. rhodae P. Henn. et Shir.
Taphrina pseudo-cerasi Shir.
Uredo inoueyei P. Henn. et Shir.
Uromyces truncicola P. Henn. et Shir.
Zythia stromaticola P. Henn. et Shir.

論文も多数あつてそのうちナン赤星病菌の中間寄主が *Juniperus* であることの決定およびいもち病菌の本邦での発見は歴史的な重要性をもつもので、その他主なものは後記の通りである。著書およそ 20 篇あり病理関係では最近植物病理学(1903)、日本菌類目録(1905)はこの学の進歩と普及に貢献するところ大きいものがあつた。

先生は趣味として早くから本草学に傾倒し、関係古文書の蒐集には異常な熱意を示し晩年整理したもので実に 38 函 5000 余部に達し、珍書に富み中には天下一品というもあり、これを背景として日本博物学年表(1891)が著わされ、またこの線に沿ひ 史上かくれた

本草家の顕彰に努め伝記の執筆に当るほか岩崎瀧園本草図譜 95 巻、李時珍本草綱目国訳 25 巻の刊行を大成した。晩年本草学会を樹立し同好者を自宅に招じ文献の展示や談話会を開き機関紙本草を発刊するにいたつた。

1911(明治 44 年)腊葉研究会を起し学生のために植物採集、腊葉の鑑定、講話会など行なうを常としたが、それは東京腊葉会として今日も続いており一昨年は第 50 周年を迎え奄美大島に記念採集を行なつた。1919 年当時の内務省に史蹟名勝天然記念物調査会を設置することになり、先生は内務嘱託として朝鮮五葉松・大山蓮花自生地決定のため甲信から大和紀伊の原始林踏査に当り伯耆大山にも登つた。また旧青山練兵場のヒトツバタゴ(ナンジャモンジャ)樹の保存に異常の愛着を示し、東北地方の饑饉を見ては救荒植物の一書を著わすなど往時の斉民の熱情を燃やしなほ漢葉の捨て難きをもつて用法を民間に伝えんと多年身をもつて試み、中毒に処する解毒法におよびたるが 1932(昭和 7 年 5 月 30 日)不幸これが犠牲にたおれたるは痛恨事であつたが、本邦最後の本草学者にふさわしい最期でもあつた。

先生幼より画を能くしそれで身を立てようかと思つたことありと申されたほどで、したがつてその写生図などは見事なものでマツの瘤病やアワの白髪病菌その他多数文献に残されている。先生また万葉風の短歌をものされよく書いて下さつたものでかつて相州大山の裏で採集、徑に迷つて難儀したとき、

阿夫利山たにまのたちひ心あらば

われ飢えにきと人に語るな

阿夫利は大山のそしてたちひはいたどりの古名である。

主要著書および論文

(本草関係のものは先生の歿後まとめて本草学論攻 1~5 にあり)

苔蘚発生実験記(1887)

馬鈴薯病菌の説(1887)

日本産松柏科植物図説緒言(1887)

麦角の説(1887)

Puccinia graminis の性質を説き併せて *Aecidium berberidis* との関係如何に及ぶ

植物病理学(1888~1890)

植物自然分類検索表(1888)

トボシはエブリコなり(1889)

植物命名法(1889)

- アスナロのヒジキの説 (1889)
 日本博物学略史 (1889)
 日本並木の説 (1889)
 日本博物学年表 (1891)
 玉蜀黍の雄穂に雌花を生ず (1891)
 八丈絹の染料 (1891)
 カズ、カウゾ、ヒメカウゾの区別 (1891)
 静岡県下採集土産 (1892)
 埼玉県下採集土産 (1892)
 波波迦の説 (1893)
 中等植物学教科書 (1893)
 同 続 編 (1893)
 九州採集土産 (1893~4)
 植物病理学上, 下 (1894)
 ヒトツバタゴの説 (1894)
 Japanese species of *Betula* (1894)
 日本樺属の説 (1894)
 アカカンパ及びホザキヤドリギ (1894)
 ナガバノイヌシデ (1894)
 ニレエノキ (1894)
 唐崎の松の病原 (1894)
 ニレモミの説 (1894)
 塩鉄樹の虫癭に就て (1895)
Villebrunea の日本新種 (欧文) (1895)
 桜樹の天狗巢病に就て (1895)
 桜樹に寄生する新種の病菌に就て (1895)
 日本産落葉櫟属の説 (1895)
 駿遠和紀採集植物の説 (1896)
 寄生菌より起る粟の病害に就て (1897)
 四国植物採集旅行見聞録 (1897)
 北海道採集植物の説 (1898)
 腐蝕に似たる囊菌に就て (1898)
 デーテル東部アジア産の新種の銹菌類 (1889)
 日本森林植物報知 (欧文) (1898~9)
 日本産松属に生ずる木癭の原因をなす病菌の説 (1898)
Peridermium giganteum と *Cronartium quercuum* との世代的関係に就て (欧文) (1899)
 Ueber den genetischen Zusammenhang zwischen *Roestelia Koreaensis* P. Henn. und *Gymnosporangium japonicum* Syd. (1900)
 救荒植物 (1902)
 最近植物病理学 (1903)
 稲いもち病菌説の補遺 (1905)
 日本産樺属説の正誤及補遺 (1905)
 漢葉猪苓の説 (1905)
 日本菌類目録 (1905)
 「アンペラ」蓆原料に就て (1905)
 ワード氏の箱に就て (1905)
 独乙高山リーゼンゲビルゲ植物採集行 (1905)
 新領カラフト島に於ける最初の邦語植物図譜に就て (1906)
 樟の白絹病菌に就て (1906)
 再びワード氏の箱に就て (1906)
 我邦に於けるカラタチの生育区域の北方限界に就て (1907)
 朝鮮人蔘の病害に就て (1907)
 小野蘭山先生の百年記念遺物展覧会に於て (1907)
 青山練兵場の名木ヒトツバタゴに就て (1907)
 梓弓の材に就て (1908)
 増訂日本博物年表 (1908)
 代々木御料地内樅の巨木に就て (1908)
 千葉県に於ける竹林枯死に就て (1908)
 小野蘭山先生の伝 (欧文) (1909)
 日本産寄生菌の新種 (欧文) (原氏と共著 1911)
 維新前の植物園 (1911)
 史木・名木・珍草・奇卉の保有に就て (1911)
 松の話 (1912)
 植物妖異考 上, 下 (1913)
 植物渡来考 (1914)
 東京附近名所の桜 (1914)
 柑橘の新果に就て (1915)
 第一代雑種の変異現象 (優性の不完全なること) 及びデゴタキシスに因るその可能的解説 (1915)
 最新植物病理学提要 (1917)
 訂正増補日本菌類目録 (1917)
 On the Development of Plantpathology in Japan. A brief historical sketch. (1918)
 染料植物及び染色法 (1918)